

「ト一横」キッズの現状と解決策

新井 萌奈

- 1 はじめに
- 2 「ト一横」の現状
- 3 青少年はなぜ「ト一横」に集まるのか
- 4 青少年が「ト一横」に来訪するきっかけ
- 5 犯罪学からみる「ト一横キッズ」
- 6 現状の支援
- 7 課題と解決策
- 8 おわりに

1 はじめに

昨今、「ト一横」が、生きづらさを抱える子どもたちが、居場所を求めて全国から集まる溜まり場として、テレビやネットなどのメディアによって報道されている。家や学校に居場所がない青少年少女たちが、SNSを通じて、新宿区歌舞伎町にある TOHO シネマズの横の通路に集まり、飲酒、喫煙、オーバードーズ、リストカットなどの自傷行為を行う者もあり、社会問題となっている。現在も、都や警視庁などが、対策を講じているものの根本解決には至っていない。

ここから、「ト一横」に集まる青少年は、何らかの問題を抱えており、孤独を解消するために「ト一横」に集まってきているのではないかと考える。また、青少年少女は孤独の解消が目的であり、場所にこだわりはないと考える。そのため、「ト一横」からいなくなったとしても根本解決にはならないが、「ト一横」で行なった施策が他の場所に

においても有効に作用するのではないかと感じた。そして、青少年の非行を未然に防ぐために、大人がどのような支援ができるのかを考えていきたい。

本論では、「トー横」の現状を整理すると共に、課題と改善策についても論じていく。

2 「トー横」の現状

「トー横」には、数年前から青少年が集まり始めた。実際に警視庁によると¹、「トー横」周辺での補導件数は、2020年が年間70件だったのに対し、その数は年々増加、2022年は約580件、2023年は約950件にものぼった。警視庁少年育成課は2024年12月16日に、「トー横」と呼ばれる一角周辺で、1～11月に少年少女ら延725人を補導したと発表した。これは、前年と比較すると1割減少している。理由としては、令和5年4月に、東急歌舞伎町タワーが開業し、シネマシティ広場の周辺や、地下通路などに分散したことが理由だと考えられるが、依然として「トー横」に少年少女が集まっている状況に大きな変化はない。

また、「トー横」に集まっている少年少女の多くは、中学生、高校生であり、女性が8割近くを占めている。加えて、首都圏だけではなく、大阪や徳島など、都外の都道府県に居住している青少年も多く確認されている。

そして、「トー横」に集まった少年少女は、悪意のある大人によってパパ活や援助交際などの、児童売春の被害にあったり、暴行、窃盗等の犯罪行為を行うことがある。加えて、飲酒、喫煙、オーバードーズ、リストカットなどの自傷行為が断続的に発生している状況である。実際に、オーバードーズによる補導は増加している。

具体的には、2021年11月27日、新宿・歌舞伎町の雑居ビルの屋上で、ホームレスの男性が少年らからランチの上、殺害されるという事件が起こった。肋骨の骨折は38

¹ Yahoo!ニュース,2024,「トー横で補導、今年述べ725人 1割超減、警視庁「徘徊減った」」 [トー横で補導、今年延べ725人 1割超減、警視庁「徘徊減った」\(共同通信\) - Yahoo!ニュース](#) (2025年1月28日)

ヶ所で、内出血も多くあり、顔は原形をとどめていないという悲惨な暴力を受けていたという。また、少年少女がホテルから飛び降りて自殺したりするなど悲惨な事件が起こっている。

このように、「トー横」では、さまざまな問題が起こっている。

3 青少年はなぜ「トー横」に集まるのか

少年少女が「トー横」に来訪する背景として、家庭環境や学校に悩みを抱えて、生きづらさを感じており、居場所を求めていることが挙げられる。

具体的に、家庭環境の問題としては家族との不和、児童虐待、貧困、学校関係者では、友人との不和、いじめ、学習面の悩み、不登校等、その他にも、刺激・非日常感を味わうため、興味本位などの理由もある。²このことから、一つだけではなく、複数の問題が絡み合っていることが分かる。

実際に、あるインタビューでは、家族は大事だけれど、本心を伝えることができず、家にいることが辛くなり、逃げるために「トー横」に来ている子や、親のネグレクトから自分の居場所を求めてやって来た子がいた³。

これらのインタビューや調査から、共通していることは、子どもたちは常に疎外感を抱えており、「トー横」が唯一の居場所になっているという点である。

4 青少年が「トー横」に来訪するきっかけ

令和6年1月に生活文化スポーツ局都民安全推進部が青少年の保護者を対象として行

² 東京都青少年問題協議会,2023,「犯罪被害等のリスクを抱える青少年への支援」,第29期 東京都青少年問題協議会 第1回専門部会 (2025年1月28日)

³ NHK 首都圏ナビ,2024,「新宿歌舞伎町の子どもたち「トー横」に集まる理由はタワーの開業で再開発進む」新宿歌舞伎町の子どもたち 「トー横」に集まる理由は タワー開業で再開発進む | NHK (2025年1月28日)

われた、「家庭における青少年のスマートフォン等の利用に関する調査」⁴によると、都内在住の高校生の90%以上、中学生の80%以上がスマートフォンを所有していると回答しており、スマートフォンを所有している青少年の70%以上がSNS（LINE、X、Facebook、Instagram、TikTok等）を利用していると回答している。さらに、「子どもが、SNSやインターネットを通じて知らない人とやり取りをしたことがあるか」という質問に対して、高校生は約20%、中学生は約18%があると答えている。その中で、直接会ったと答えた人は高校生・高校生共に14%であった。この調査は、保護者を対象としているため、実際には更に多くの青少年が知らない人とやり取りをしたり、会っている可能性があると考えられる。

ここから、SNSの利用の拡大が、「トー横」を訪れる青少年に影響を与えていることは否定できない。

5 犯罪学理論からみる「トー横キッズ」

そもそも、「トー横」キッズのような集団、今に始まったことではない。いつの時代も、若者たちは仲間同士でたむろし、大人と違った行動を取ることでアイデンティティーを確認し、承認欲求を満たしてきた。具体的には、1980年代の竹の子族やローラー族、90年代のジュリアナ族がある。このような「族」と呼ばれる集団と「トー横」が異なっている点としては、帰属意識の低下やコミュニケーションの希薄化、匿名化であると考えられる。そこでは、集団の凝集性は感じられず、孤立した個人の寄せ集めの状態であり、アイデンティティーの確認よりも、他人によってラベリングされる集団となった。

立正大学教授の小宮信夫⁵によると、非行は、「過去からの流れ」で起きるため、動的・長期的な視点から構築される必要がある。そこで、「発達の犯罪予防論」をここではあげた

⁴ 東京都生活文化スポーツ局,2024,「家庭における青少年のスマートフォン等の利用等に関する調査報告書」(市・町) 調査 (2025年1月28日)

⁵ Yahoo!ニュース,2023,「暴走族からトー横キッズへ 若者の「非行」問題を犯罪学論から考える」暴走族からトー横キッズへ 若者の「非行」問題を犯罪学理論から考える #子どもをまもる (小宮信夫) - エキスパート - Yahoo!ニュース (2025年1月28日)

いと思う。「発達の犯罪予防論」とは、個人のライフコースを、道筋を選択できる分岐点の連続とみなし、それぞれの分岐点で非行への道を選ばないよう、分岐点に応じた働きかけを行おうとする発想である。発達の犯罪予防論では、緊張理論の視点、非行に走るかを説明するものを「危険因子」と呼び、逆に統制理論の視点、非行に走らない理由を「保護因子」と読んでいる。アメリカ司法省のモデルプログラムを参考にすると、危険因子として、認知障害、飲酒行為、家庭不和、児童虐待、学業不振などが挙げられている。一方、保護因子としては、自尊心、積極的性格、社会的能力、家族の結束などが挙げられている。

ここで、「トー横」キッズはどうか考えてみたい。「トー横」キッズは、さきほども述べた通り、家庭や学校に居場所がないことつまり、孤立・疎外感が問題行動の根本にあると考えられる。この疎外感は、危険因子リストにある家庭不和、児童虐待、学業不振から生まれると考えられる。統制理論で考えると、「社会的な絆」を感じられないということである。実際に、内閣府が発表した、「令和4年版子供・若者白書」⁶によると、どこにも居場所がないと感じている子どもや若者は全体の5.4%に上る。このように、疎外感が生まれると、本来なら非行のブレーキになるはずの「絆」がなくなり、家出、退学、非行集団への参加につながりやすくなると考えることができる。

6 現状の支援

これらの現状を踏まえて、行政や民間団体が取り組みを行っている。

「第33期東京都青少年問題協議会」⁷の報告書で以下のように報告されている。

東京都生活文化スポーツ局都民安全推進部では、青少年または大人が、「パパ活」、「援助交際」など、青少年の性被害に繋がりやすい言葉を検索エンジン等で検索した際に、危

⁶ 内閣府,2022,「令和3年度子ども・若者の状況及び子ども・若者育成支援施策の実施状況」,[20220614kodomogaiyo.pdf](#) (2025年1月28日)

⁷ 東京都青少年問題協議会,2023,「犯罪被害等のリスクを抱える青少年への支援」,[第29期 東京都青少年問題協議会 第1回専門部会](#) (2025年1月28日)

険性に関する注意喚起の広告が表示される。

東京都福祉局では、様々な困難を抱えた若年女性について、公的機関と民間団体が密接に連携し、アウトリーチからの相談をえた、居場所の確保、公的期間や施設への「つながり」を含めたアプローチを実施している。警視庁では、「トー横」の青少年を対象に、一斉補導を行ったり、児童売春、児童ポルノに係る行為等の規制及び処罰並び児童の保護等に関する法律違反者など、青少年に加害行為を行う者については、様々な法令を駆使し、徹底的な取り締まりを実施している。

また、新宿区では、令和3年度から、民間の警備業者に委託し、見守り活動を行うなどしている。行政だけではなく、民間団体でも困難を抱える者の相談等を行なっている。

7 課題と解決策

現状、上記のような対策を行なっているものの、未だに課題は多く残っている。

具体的な課題とその解決策を2つ挙げたいと思う。

1つ目は、「トー横」に青少年が集まることだ。青少年は、悪意のある大人に囲まれていることや、その危険性を認知できていないと考える。これらのことから、犯罪被害者になりリスクが高いといえる。これを解決するためには、本人の認識を変える必要があり、関係団体と連携を深めるだけでなく、青少年がよく用いる SNS のツールを使い啓発活動をする必要があると考える。

2つ目は、対応できない場所があるということだ。未だに、「トー横」周辺のネットカフェやホテルでは、複数人による滞在や児童売春が問題になっている。これは、監視の目が行き届いていないことが問題であると考え、ここから、まずは事態を把握し、ホテル業界と警視庁の連携を強化し、ホテルにポスターをはるなど、ホテルにも監視の目があることを周知させることが必要であると考え。これによって、不法の滞在はなくなる可能性はあるが、青少年が行く場所がなくなり野晒しになってしまうという新たな問題も生じるのではないかと感じた。このことについて、具体的に見ていきたい。先ほど挙げた通り、「社会的な絆」が途切れていることが原因で非行に走ってしまっているのではないかと考えられるため、「社会的な絆」があれば非行をとどまるのではないかと感じた。親から虐

待を受けている、親との繋がりが切れているといったような居場所のない若者を対象に、全国でも珍しく夜間の居場所を提供している「ヨルキチ」⁸という団体がある。この団体は、「居場所」「住まい」「仕事」の3つのサポートをしている。行政にも、暴力や育児放棄などで、家庭などに居場所がない子どもなどの支援にあたる児童相談所も存在するが、「刑務所のように」、「定員を大幅に超えて子どもが入ってきてピリピリしている」などという意見もくし入所を拒む子どもも多くいる。これでは「社会的な絆」を構築することは不可能であるため、児童相談所の問題を改善するとともに、子どもたちを見守る団体を作ることによって、「社会的な絆」を築くことができるのではないだろうか。

8 終わりに

今回、この論文を書くにあたり「ト一横」キッズを調べると、彼らは、孤独を抱えており、同じような悩みを抱えた人との繋がりを求めているのだということを感じた。また、保護者と離れて暮らすため、お金が必要となり、児童売春や詐欺などの非行を行なってしまうのではないかと考える。これを解消するためには、周りの環境を整えることが必要不可欠であり、行政や民間の団体など大人が介入することで、「ト一横」にくる青少年の数が減少すると考えることができる。

⁸ 日本財団ジャーナル,2025,「居場所のない若者への居場所づくりに取り組む。目指すのは「ト一横」と「行政」の間にある存在」(2025年1月28日)